

Interview

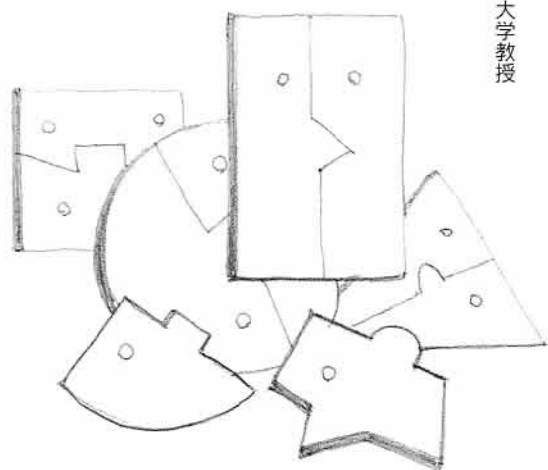
戦後日本社会、団塊の世代の生き方、
鋭い眼差しで批評を続ける野田正彰氏が、
それらとの対比を含めてポスト団塊の世代としてのミドルを論じた。
絶望的な印象の中に、新たな兆しもうかがえる。

ミドルを迎えた 摩擦回避世代

野田 正彰

精神病理学者・京都女子大学教授

聞き手・中間 真一



反抗しない 豊かな世代の誕生

——今回HRRが対象とした「ミドル」とは、現在35歳から49歳までの人々で、ミドル期にさしかかっている年代も含めています。

この時代はポスト団塊の世代として、昭和30年代から40年代初頭までに生まれ、本当に貧しい社会は経験せず、経済成長期と自己形成期がほぼ一致していた「コーホート」でもあります。野田先生の著書『ミドルの転機』では、団塊の世代を主な対象者として、ていねいなインタビューを通して、深い考察をされていましたが、現ミドル世代はどのような世代として映りますか。

ひとことで言えば、上の世代を批判しなくなった世代です。つまり、文句を言わない人たちです。コンプレックスにより、生き方が振り回されるようなことは、ほとんどなくなつた世代ですが、自分とは何なのかをはつきり持たず、ふわふわしている。社会とかかわりの中で、積極的に訴えかけていく意志がない。何か社会に間違っていることを感じて、何ら抗議もしない。抗議する意志を持たなくなった、ほとんどムキにならない世代です。

——厳しい批判と映りますが、このことは、ミドル世代だけの特徴なのでしょうか。いいえ違います。このような反抗しない

人々の登場は、この世代に生まれて、その後ずつと今の若い世代にまで続いていきます。このような無抵抗な人々で構成される社会は、世界的に見ても日本社会の特殊現象といえるでしょう。

——なぜ、ムキにならない世代になつてしまったのでしょうか。

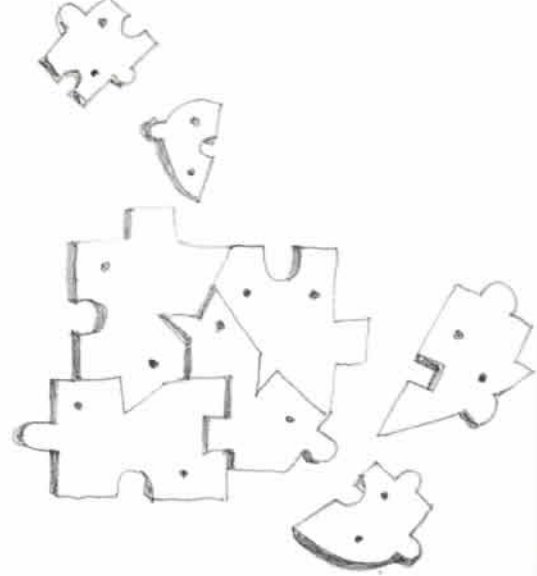
それは、人格形成のプロセスにおいて、自我を統合して、自分の生き方を決めていくような、そんな人格形成をしてこなかったことによつています。

この上の団塊の世代は、世代の出来事として、大学闘争を体験しました。彼らは、極めてちゃんとした反抗だけれど、社会に対する何がしかの反抗をしたのです。しかし、その反抗は実を結ばずに終わり、彼らは徹底的に叩かれました。

団塊の世代が 反面教師

——徹底的な叩かれ方とは、どんな叩かれ方だったのでしょうか。

アメリカと比較すると、わかりやすいでしょう。ほぼ同時期にアメリカでも反戦運動が、同じベビーブーマー世代によつて激しく展開されていました。彼らの反抗の運動も、結果的には実らなかったわけですが、しかし、彼らに対するアメリカ社会の叩き



——現ミドルは、その豊かな時代に自己形成期を過ぎてきたというわけですね。

そうです。その後に来た世代が、今回対象としているミドル世代ですから、彼らはもはや、打ち倒す対象を見つけて、自己形成するというのをほとんどしていません。その上の団塊の世代が、自分たちの反抗に失敗した後、一生懸命がんばって社会への適応を心がけたのに対して、現ミドル世代は、小さいときから習性として、社会に適応した生き方を身につけて育ってきたのです。ある意味では、団塊の世代を反面教師として育ってきた世代なのです。

——それは、とくにサラリーマンの現ミドル世代が、口だけで実が伴わない団塊の世代の上司たちを、冷ややかに見ている実情にもつながります。

そうかもしれません。踏み絵によって利口にガラッと変わった会社人間の中には、会社の中で負け組にはなっていないものの、下の世代から冷ややかに見られている人もいます。社会的行為であったはずの彼らの運動が、単なる暴徒としてしか認識されなかった後、彼らは忠誠儀式としての「入社」を果たし、会社人間になった。

一方、その下の現ミドル世代の両親は、「あんなことをする人になつてはいけなし」と諭して、子どもを育ててきたわけです。だから、いい子であればあるほど、反抗

しなくなつた。そして、社会に出てからも上司としての上の世代を、生き方のモデルにしなかった。

——現ミドル世代は、会社と個人生活のバランスを上手くとって、仕事にも遊びにも、そのどこにがんばりながらやっている世代という見方はできませんか。

アニメやテレビの影響を強く受けた世代として、現実世界を少し外れたところで、「おもしろおかしく生きる」ことが上手な生き方だという価値観を、80年代を通じて身につけた世代であると思います。「上手に生きる」ことが社会の最高の価値となつたことは、近代日本社会において、初めてのことでしょう。

この価値基準によつて、幼いときから徹底して「仲良く」ということを求められてきました。それで、効率的に省エネルギーで仲良くするために、相手と合わせて摩擦を回避することを覚えた。自分の考えを相手に伝えて、その上で互いの意見を認め合つて仲良くなるという、エネルギーを要するやり方は極力減らすようにした。だから、自分の考えを持つ必要性が、文化としてなくなつた世代なのです。

——相手に合わせる生き方は、現ミドル世代の子どもも世代以降に増えた「引きこもり」にもつながりますね。

彼らは、相手に上手く合わせられてい

ないのではないかという不安から、引きこもつてしまいます。それで、外側との関係を持つことがすべて不安材料となり、自分だけの閉ざされた世界をつくるという悪循環に陥つてしまふ。相手に合わせるということが、第一の価値ではないということが分かれば、引きこもらなくても済むのですが、そうした価値観から抜けられないのです。

ミドルという転機と不安

——それでは、世代の特徴から転じて、人生の転換期としてのミドル期について、お話をうかがいたいと思います。

40代中頃は明らかに人生の転機です。体力は衰えるし、高血圧も出てくる。世代の問題に無関係に、生理的に転換期であるといえます。また、子どもの問題で悩み始める。夫婦の問題も出てくる。こういうことは、アンケートではとらえにくい問題ですが、自分をとりまく生活の中に、いくつもの転機がやつてくる時期です。

——会社組織の中で働いている人も、同様に40代中頃は転機となりますか。

『ミドルの転機』でインタビューしたときは、もう少し後の40代後半に会社の中の生き方の転機を感じました。

そのくらいの年齢になると、会社の中で

方は、日本のような徹底的な叩き潰しではありませんでした。クリントン・元大統領も、反抗した側の一人だったことからわかるように、ベトナム反戦運動の若者に対して、彼らの自我、あるいは社会に対峙して主張できる自分を残すことが許されたのです。

また、日本の団塊の世代は、徹底的に叩かれた上で、徹底した「踏み絵」をさせられました。自分のしたことを謝罪し、悔い改めて「会社人間」になるという宣誓を強いられたのです。これにより、日本の団塊の世代は、それこそ塊になって、こぞって会社人間となり、出世競争に入っていくしました。これによって、70年代から80年代の「豊かな社会」が築かれたわけです。

のこれからの自分のコースが、自身にも読めてくる。そして、たいがい人は、もうこれでいいのだという思いに至るのです。この段階に至って、さらに会社の中でがんばり続けなくてはいけないと思う人は、それほど多くはないでしょう。

——しかし、不況やそれに伴うリストrafの中で、会社はミドル世代に対して、かなり厳しい要求を出しています。がんばり続けないなら、いなくてもいいという状況です。

そうです。80年代までであれば、40代後半になって、この先の自分が見えて、後はこのまま問題を起こさずに過ごしていこうと思えたのだけれど、今の不況の中では、「このまま」でいられるかどうか、ミドルの大きな不安の材料となっています。

——「このまま」という状態を確保できるのが当たり前だった時代と、もはや困難と宣告されている現在とでは、ミドルという転機の処し方が大きく違ってきます。

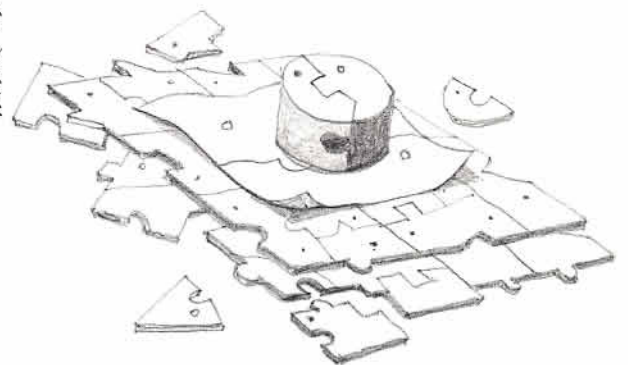
自分の条件は変わっていないのだけれど、このまま続けられるのかという不安は、極めて高くなっています。また、この不安は、会社で仕事をする男性だけではなく、主婦にもかなり高く意識されているようです。私がかかわっている、家計経済研究所の調査結果などからも明らかです。「子どもがまともに育たないのではないか」、「治安が悪くなっている」など、これ

までは自分の老後の生活など、漠然とした個人的な不安が多かったのに、これから先の社会への不安が、40代中頃の女性層の中で、大きくふくらんでいます。

——勤務先のリストrafが一段落して、ふと気がつくとな上の世代がそこと抜けて、自分自身が中間管理職の最前線に置かれていることに気づく。大企業だからといってこのまま定年まで安泰なわけがない。だからがんばらなくちゃと言つが、目先の課題はあつても、その先に展望すべき人生の目標は見えてこない。

安っぽい価値観、つまり、部長や役員になれるのか、給料が上がるのか、そんな価値観を当たり前として受け入れて、今までやってきたのがミドルのサラリーマンなのです。だから、それらの価値がなくなってしまうようなことになると、目標がなくなってしまう。今までの目標の価値が揺らいでしまうと、それとは違う別の自分をつくりたいという新たな目標が必要となる。しかし、思い切れない。ガーデニングや畑仕事をやって楽しめばいいのに、なかなかそんな思いに到達できないでいる。

——とにかく、ミドルという時期は、背負うものはピーク、ゆとりはどんだ底の状態です。加えて、新しい中間管理職としての能力を問われる。このような中で、ミドルの心や体の健康は大丈夫でしょうか。



会社をあてにしても
しょうがない

——かつて、団塊の世代がマネジャーになつたときと、今のミドル世代がマネジャーになつている中で、問題の差はありますか。

それは変化速度の違いです。大企業だからといって、安心していられない。団塊の世代がミドル期を迎えたときは、「勝ち組」も「負け組」も、居場所としての会社自体はそのまま続くと思つていた。しかし、会社の顔つきが、ある日あるとき、急に変わってしまうのが今です。会社という存在

に、これまでのように頼ることができなくなつてしまった。この急激な変化は、とくに現ミドル世代に大きな影響をもたらしています。

最近の経営者には、カリスマ的な人もいなくなつた。リストラ担当型で、明らかな短期リリーフ経営者が目立ちます。このタイプの経営者は、そのうち、いなくなるものとわかつているわけだから、働く人々にとつて忠誠の対象ではないわけです。だから、この下の中間管理職は相当につらい。

また、日本の場合は、労働市場がオープンになっていないのに、リストラが進行して

いる。だから、会社と個人の関係がフェアな関係となっていないことも問題を一層深刻にしています。

このようにして、90年代後半までと比較すると、会社にしがみつくのはもう無理だという意識がとて強くなつていく。最後は会社がなんとかしてくれろという意識がなくなつてきていくということは、会社と個人の関係の大きな変化です。

——そのような周囲の変化を伴つた中で、自らも変化点を迎えている現ミドルは、変化点の先に、どのような目標を置いて生きることが必要になるのでしょうか。

この世代は、戦後初めて資産が目減りし始めている世代ではないでしょうか。金利も、ボーナスも、給料も減つて、20代、30

代を通して一生懸命働いたのに、それが報われていない世代です。この点上の団塊の世代は違います。彼らは、若い頃の苦労がバブル期に存分に報われた後、現在の変化を迎えています。すでに逃げ切れています。

しかし、現ミドル世代は、子どものときからの習性として、批判したり、反抗することをしてこなかった世代だから、こういう状況になつても、何となく「いやだなあ」と心の中で思つたり、身近な内輪話として不満を漏らすだけで、社会にそれを表そうという動きはいささか示さない。

こんな状況だつたら、自分たちへの正当な処遇を要求する発想くらい、出てきて当たり前だと思います。しかし、そんな動きは労働組合をはじめ、現在の会社の世界ではまったく起こる気配もない。このこそ、異常なのではないか。

こうなると、勝ち組の人のほうが、会社にしがみつて生きようとし始めます。勝ち組という仲間集団の中で、仲良くできる限り、頼るべき会社を守ろうとするのではないのでしょうか。

——それは、かなり消極的な生き方となりますが、より積極的なミドルの生き方を展望することは困難でしょうか。

身近な社会の関係の中で、フェース・ツー・フェースの関係から歡びを見い出すような生き方をしたほうが得だと思ふの

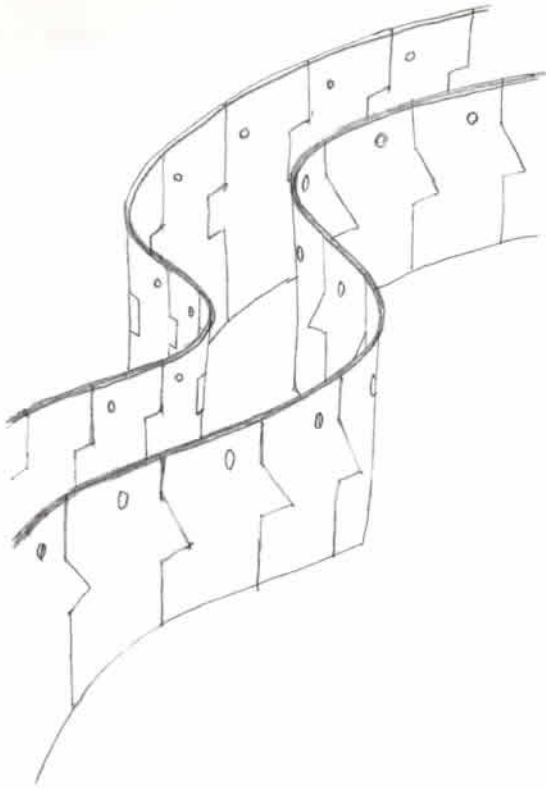
だが、なぜそうならないのでしょうか。最近、年輩になつてから再び大学に入るのが流行つているが、なぜ性懲りもなく、自分だけのビジネスのための知識を増やし続けようとするのでしょうか。なぜ、子どもたちと遊んで互いに歡び合えるようなことをしようとしなのではないでしょうか。子どもの相手となると途端に、遊びではなくて、教壇に立つて、自分の素晴らしい経験を子どもたちに授けようとか、そんなことになつてしまふ。そんなことよりも、自分たちがこれまでにしてこなかった、人間関係を楽しむということを、少しでも身につけて、子どもと遊んだり、土に親しんだりしたほうが、ずっとよいと思うのですが。

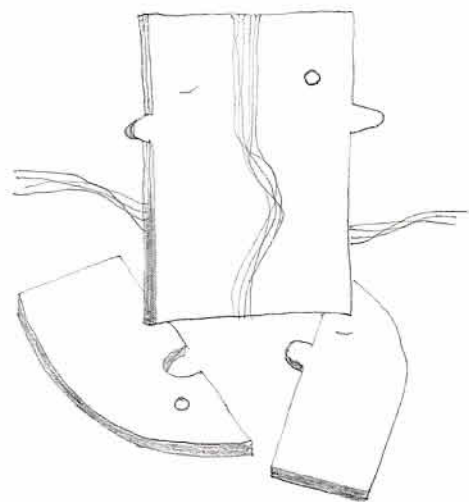
ミドル世代から

自律社会の萌芽を望めるか

——HRでは、将来の望ましい社会像や生き方として、自律社会、自律的な生き方の必要性を主張しています。この方向に動く担い手として、ミドル世代に期待できないでしょうか。

この世代は、摩擦を起こさないという意味では、自律した世代です。しかし、それは人間関係が希薄な中での自律ですから、自律社会には発展しません。社会への関心がない。社会を良くしようという意識と





行動が、まったく感じられない世代には期待できません。

しかし、この後の若い世代は、より保守化している世代です。そう考えると、ミドル世代は、現状を維持しながら、社会変化の契機をとらえて、新たな動きに乗っていくくらいできる世代かもしれません。

自律社会への動きが生まれるとする、もはや上の団塊の世代以上ということも、あり得ないでしょう。現ミドル世代は、その上の団塊の世代と較べて、古い浪花節的価値観が極めて薄い世代です。「個人」ということを、実生活の中で具現している世代です。それは、離婚やセックスレス夫婦、放任教育など、夫婦関係や親子関係に如実に表れています。だから、可能性があるとすれば、このような個人という

感覚を、自閉の方向ではなく、何かの拍子に社会に向ける動きに変えられれば、真の意味での自律社会も可能かもしれません。

遅咲きの市民派に

ミドル世代の可能性

——最近の社会の中では、経営者、政治家、文化人などでも、ミドル世代の活躍が目立つように感じられますが、いかがでしょう。たとえば、長野県知事の田中康夫氏も、この世代に該当します。

社会評論をする人でさえ、この世代の人たちは、社会現象をおもしろおかしく切り取って言論を成り立たせているような人ばかりです。先日、書評を書いたノンフィクション作品(高橋秀実)「からくり民主

主義」草思社)も、まったく頼りがいのないものでした。著者は何が言いたいのか、何を調べたいのか、まったくわからない。しかし、記事や資料を丹念に調べ、細かい知識だけは十分に身につけている。しかし、最後まで著者は何を知ろうとして取材をしたのかわからない。こういう最も作家と縁遠いと思われる主張のない人が、今の時代の社会評論家として成り立っている。

この世代は、村上春樹や吉本ばななが受ける世代ですね。浅田彰もこの世代の典型といえます。彼の美術論などを読むと、知識を集め、比較し、整理してまとめているが、本人が美術を楽しんでいるという様子は、あまり感じられない。

その浅田彰と仲の良い同世代が、長野県の田中康夫知事です。彼は、震災を通して、遅ればせながら社会派となりました。彼の姿勢は、ポーズではなく、本気で市民社会を築こうとしています。

——それでは、このミドル世代から、市民社会の萌芽を望めるかもしれません。

それは、困難でしょう。市民社会は、試行を積み重ねながら成立するものです。だから、摩擦回避で試行をしないこの世代の人々の中からは、市民社会は生まれません。しかし、一つ可能性として考えられることがあります。田中知事のきっかけもそうなのですが、各地のボランティア活動のフロン

ティアとなっている人たちが、このミドル世代です。このことは、注目すべきことです。社会派ではないのだが、自分や自分の周囲の問題に対しては労を厭わない世代でもある。

もしかすると、今までの社会派のやり方とは違う、上手く、おもしろおかしく生きる現ミドルから、新たな社会の動きが生まれるかもしれません。

——終始一貫して、手厳しいミドル世代批判となり、私自身「反抗しないミドル世代」の一員ですが、少し反発したくなります。指摘を受けたミドル世代の生き方は、前向きに活かすこともできるものだと感じるからです。世代特性の負の側面を、正の方向に転換させる。社会の転換期に重なる人生の転機を迎えたミドルだからこそ、やれるかもしれません。本日はありがとうございました。

野田 正彰(のだ まさあき)

1944年、高知県生まれ。69年北海道大学医学部卒業。長浜赤十字病院精神科部長、神戸市外国語大学教授などを経て、現在、京都女子大学教授。専攻は文化精神医学、比較文明論。主な著書に「生きがいシエリング」(中公新書)、「コンピュータ新人類の研究」(文芸春秋、大宅壮一ノンフィクション賞受賞)、「喪の途上にて」(岩波書店、講談社ノンフィクション賞受賞)、「素乱のロシア」(小学館)、「中年の発見」(新潮社)、「庭園に死す」(春秋社)、「中年なじみ」(ダイアモンド社)などがある。